月刊ウィーン GEKKAN-WIEN

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年　創刊30年目　Nr. 345

2018年5月号

ANTON ROMAKO
PORTRAIT DER GRÄFIN MARIA MAGDA KUEFSTEIN, GEB. KRUEGER, 1885/86
© Leopold Privatsammlung/Foto: Leopold Museum, Wien/Manfred Thumberger

杉本純の 原子力の話 II ウィーンと京都 78

筆者が本年三月末まで勤務した東京工業大学グローバル原子力安全・セキュリティ・エージェント教育院（通称「道場」）では、文部科学省の支援により「人類の生存基盤を脅かす核拡散、核テロ、大規模な原子力災害や緊急被ばく問題等のグローバルな原子力危機」の分野において、国際的リーダーとして活躍する人材を育成することを目的とした修士・博士一貫プログラムを実施している。三月二七日、環境エネルギーイノベーション棟・多目的ホールにおいて、平成二九年度道場修了式がとり行われた。当日は、齊藤正樹教育院長からの挨拶の後、三人の来賓から祝辞と貴重な講話を頂いた。

今回、四年半にわたるコースを修了したのは、三名の二期生。修了生一人ひとりから、博士号が授与されるまでの苦労や楽しかった話、成長の実感、教職員への感謝の言葉が述べられた。道場生代表から先輩を送る言葉を述べられるとともに、教育院関係者の署名入りの色紙が授与されるなど、参列した方々から暖かい声援を受けた。修了生三名は原子力関係の企業や研究所に就職し、高い志を胸に、将来世界で活躍できるリーダーを目指し、実社会において身を以て実践すべく、三人とも自信に満ちて笑顔で羽ばたいていった。（本文、写真とも写真中に記載のurlより）

なお、当日大阪大学で開催中の日本原子力学会春の年会において、本教育プログラム活動が原子力平和利用の進展に寄与するところが大きいと評価され、日本原子力学会貢献賞を受賞したことを付記する。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の野球事情について述べてみたい。現在オーストリア野球連盟には約三〇球団が加盟していて、その中でリーグのトップに当たるABLには六球団、その下にBBLがあり、地域によって三地区に分けられている三部地域リーグ、そして四部州リーグの四部リーグで構成されている。先月紹介した日本人ソフトボールのメンバーを中心とするチームジャパンは、二〇〇八年から高島監督のもと州リーグ東地区に参加して二位となって翌年地域リーグ東地区に昇格し、二年には同地区で見事優勝を果たした。その後、地域東地区に昇格したが最下位となり、一七年は州リーグ東地区で再度優勝した。その他、高校女子野球のリーグ戦などもあり、欧州ではオランダやイタリアほどではないが結構盛んである。

一方京都では、中高大学のほとんどに野球部がある。龍谷大平安高校は京都の高校野球界のトップに君臨し、甲子園と言えば同校と言っても過言ではない。春夏合わせて甲子園出場は七三回と全国一を誇り、二〇一四年の選抜での優勝を含め、優勝四回、準優勝四回を達成している。京都市出身のプロ野球選手も多いが、阪神の吉田義男、広島の衣笠祥雄、大洋・横浜の斉藤明雄が有名である。一般も強豪が多く、例えばSECカーボン（京都）は、天皇賜杯全日本軟式野球大会で二四年、二五年と連覇している。ソフトボールに比べれば若手を中心に軟式草野球を楽しんでいる。軟式の一般向け球場としては先月号に述べたように、九面ある御所の球場が手軽に使われている。両市では、比較的若手を中心に野球を楽しんでいるのが共通している。

余談であるが、著者はウィーン滞在時、チームジャパンの正式参加前の〇七年に一回だけ途中出場して、ライト前にポテンヒットを打った。日本人選手で打率十割の記録は筆者だけと聞いている。京都では京大大学院学生時の研究室対抗は軟式野球だった。一昨年まで所属したソフトボールチームには、元平安高校で第二エースだった選手がいた。超絶の打撃と守備に目を丸くした。両市の野球事情を紹介できた幸運に感謝しつつ、チームジャパンのホーム球場とユニホームの写真を掲載させていただく。

■杉本純　前京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長■